

量を變す可く簡單に之れか法則を求むる事容易の業に非ず尙吸水の一部か内部に於て化合状態になきやの懸念あれと再三同一試料を乾燥して殆ど舊乾燥状態に復する事を考ふれば低溫に於ける化合水ありとするも之れを重要視する必要なし亦實驗中眞幸の如きは一部崩壊する恐れありたるか長期間の實驗には漸次其有孔率等を異にするに至る可し。

日本刀の地鐵に關する資料

(東京帝國大學工學部日本刀研究室報告第二十五)

太田 熊太郎

目次

第一章 刀身製作の原料たる地鐵に就いて

一、鐵鋼の種類產地及び性質

二、一般鐵性及び其の實用上に於ける得失

三、南蠻鐵に關する記事

第二章 打上後の刀身を意味する場合の地鐵

一、地鐵

二、地色、刃色

三、地肌

四、地肌の種類

イ、板目、柾目 ロ、梨子肌及びキン ハ、松皮肌 ニ、禾肌^ホ ホ、雲肌 ヘ、水流^{スナガシ} ト、スミ肌

チ、チケイ リ、地符 ス、稻妻 ヌ、移り フ、良^{ヨシ} ワ、蟬の肌

カ、湯相

ヨ、スエル

タ、スカル

レ、シミ

ソ、地足

五、刃音

第一章

緒言

刀劍に於いて地鐵といふ言葉も亦二様の意味を有してゐる。其一は刀身製作の原料となるべき根本の鐵を意味するのであり他の一つは其の根源の鐵に種々の作業を加へられたもの則ち鍛鐵焼入及び研磨などの作業の終つた所謂打上後の刀身たる鐵の性質を指していふのである。猶此外に刀身中刃部を除いた他の過半部をも地鐵と稱することがあるがこれは姑く別問題とする。前者に就いては別に面倒な點もないが後者に於いては其の言葉は可成り漠然たる意味に用ゐられて居つて其の文字の意味を明瞭に限定することは甚だ困難なことのやうに思はれる。但し茲に述べやうとするのはさう嚴密な意味のものではなく表題の如きは大體の目標を示したに過ぎないので地色、刃色、地肌、刃音など稱するものは勿論沸、匂、移り、稻妻、金筋、砂流、チケイ、打ノケ、湯走など稱せらるゝものを包含する廣い性質を有するものを指していうのである。

最初前者に屬する地鐵のことから述べるのであるが其の產地種類及び性質などを考ふるに當つて僅かに數書の刀劍書が主たる材料であつて是等に關する一般諸書を參考する機會を得て居らぬことは頗る不完全のことであらうが此點は豫め御諒恕を願つて置く次第である。

(一)

さて古今鍛冶備考卷一に鐵の出所として奥州、但州、因州、伯州、雲州、石州、播州、作州、備中、備後、藝州、薩州の十二ヶ國を挙げ猶其他諸國から出づるけれども其品少ないことであるから略すとある。

水心子の劔工秘傳志上之卷、諸國の鐵皆鋼なるごとくいふ條に當時鐵山の場所として右鍛冶備考に挙げた中の因州一ヶ國を除いた十一ヶ國を挙げ、此外にも産する國があるけれども其國だけで用ゐて他國には出さぬといふ然るに鋼は右十一ヶ國の中伯州、雲州、石州の三ヶ國ばかりで他にはない薩州などには鐵山八ヶ所程あるけれども鋼になる砂鐵はないから地鐵にばかり吹出すといふのは間違つて居る云々というて居る、猶水心子の刀劔辨疑下之卷に殆んど右と同様の記事がある、因みに前きの古今鍛冶備考の鐵山に關する記事には水心子正秀補助といふことが明記してあるが恐らく是等の條項は全部水心子が擔當したのであらう、ところで刀劔辨疑下の卷の記事を抄録すれば左の如くである。

鐵の出づる所播摩、但馬、美作、因幡、伯耆、出雲、石見、備中、備後、安藝、薩摩、陸奥、古今鍛冶備考と同説十二ヶ國の内鋼は播州、伯州、雲州、石州の四ヶ國より吹出す也然るに近頃は播州にては出さず伯州、雲州、石州の三ヶ國より出るあり、完栗鐵は播州完栗郡千草村の鐵山より出したるものといへり、又出羽と唱ふる鐵も地名を以て鐵と呼ぶのでは是は石州色知郡出羽村より出づる物にて俱に今世に流行する鋼の始とぞ依て右完栗鐵をば其所にては白鋼と唱ふるなり當時播州にては吹出さずといへども播州の名目にて通ずる所あり、又出羽鋼も他所にては出羽と唱ふれども其所にては水入鋼と唱へ今は又出羽様の鋼を雲州よりも出すと聞けり、云々。

新刀問答上卷に鐵の産地に就いて次のやうに記してある。

(前略)鐵は石州出羽鐵、伯耆鐵、播州完栗の千草鐵などなり。

新刀辨疑卷之一には

鐵の出所は先石州出羽鋼、播州完栗及び千草扱ては南蠻鐵とて和蘭人の齎渡る木の葉形瓢箪形の鐵を以て造り又卸鐵にて造る云々。

又刀劔固癖錄に

日本劔工用所鐵石州出羽播州宍粟又千種云雲州印賀生鐵南蠻鐵也

鐵山秘書には諸國鐵の產地に就いて次の如く述べて居る。

播摩、但馬、美作、因幡、伯耆、備中、備後、出雲、石見、安藝、薩州也、奥州ニモ有トハ聞トモ未詳、凡鐵ハ何國ニモ

有ルモノ也、予先年吉野山へ參詣セシニ大和ノ岡村へ通リテソレヨリ妹山越ニ行ク道筋ニ柏ヶ森

ト云山家アリソレヨリ妹ヶ峠へ登ル道筋ニ粉鐵夥シク有粉鐵美布性ウツクシクモ可能カリ見得シ也高取ノ

御城ノ後ノ山ナリ其日ハ秋雨大イニ降リシ日ニテ顯ニ見エシナリ

伊勢ノ國多磨タマ留ルト云所ノ近邊ニ粉鐵多ク有ルヨシ津留ツル逢鹿ナド云所ニモアリト鐵山カセキ持カセキノ者共伊

勢參宮ノ序ニ見タリト物語セシナリ其外國々ニ粉鐵ハ多ク有物ナリ

諸國鐵を産するといふ説は他書にもまゝ見ゆることである、大村加卜の劔刀秘寶に相州正宗始め相州鍛冶が其地鐵を鎌倉海岸の濱砂鐵に得たといふことが見えて居るのは其一例である、猶鐵山秘書に次の如き記事がある。

四國ノ内土佐ノ國ノ海濱ニ鐵砂多クアリテ是故ニ鐵ヶ濱ト云ツケシトナン天明二年寅ノ夏石見ノ國ヘ右粉鐵ヲ船ニ積ミ持來ツテ賴ワガセガネミ治鐵ニテ試ミケルニ鐵最安ク涌シトナン然シ後雲石備作伯州ノ中ヨリ七十餘人鐵ノ諸職人ヲ雇集而今年天明三ノ春ヨリ企而同年ノ冬ヨリ鐵吹涌スヨシ云々。

以上の外窪田清音の著にて鐵の出所品さだめの事といふものを書いたといふことが同人の著「鍛記餘論」の中に見ゆるが未だ其の書に接することの能きぬのは遺憾である、猶南蠻鐵の事が諸書に散見して居るがこれは後段に一括して掲げることゝし、次ぎに各種の鋼の性質に就いて述べることにする。

竹屋政熙の察刀規矩に石州出羽鐵播州宍粟鐵美作の印可鋼(印可鋼は伯耆の所産たること普通行はるゝ説なれば本書美作とあるは蓋し著者の誤記ならん)によつて造つた刀の特徵を夫々列舉して居るこれを最初に掲げる。

出羽鐵にて造りたる道具

一出羽鐵にて造りたる道具は刃色うさやかに白くつや光り有つて鐵ひつぱり強く霑ありて青目に見ゆるものなり。

一地色は至つて黒く青めにさえかたく霑光ありて美しく見ゆるなり。

一沸つき疎沸にても細沸にても粘立ちていらぐ光りありて鮮やかに見ゆるものなり。

一亂刃のもやうどり沸くづれ焼刃ぶちぼんやりとひありて位はたらきあり直刃も同意なり

惣じて此鐵にて上手の鍛たるは位ありて鐵ひつりつや光り至つて見事なるものなり是は鐵つよき故なり下手の作りたる道具は不出來なとも研ぎの上氣味合は同じ。

一焼つめにやさたるは沸もよくかたき様なれども來の鐵よろしき故に位あり關の志津などにて見分考ふべし。

播州宍粟鐵(又は千種鐵ともいふ)にて造りたる道具

一此鐵にて作りたる道具は刃色白く細かに見ゆるうなれども白さばかりにてうるほひつやもなく底に赤みありてかはきたる心持にて只白やうに見ゆるといふ意なり。

一地色黒く刃色赤くして光りつやなく肌は至極細にして見つきは美しくかはきたる心持なり位甚卑し。

一沸つき荒沸にても細沸にても平くして精たゝず酒の如くに見ゆる出來を好む鍛冶ども高く出來るものなり全體弱き故と知るべし。

一直刃亂刃共に右の如く心得て見分くべし肥前の國の鍛冶多く此鐵を多くつかう見つきは美しく細かに見ゆれども鐵性よろしからず打おろしより古身のやうに見え位あるやうなれども誠は鐵弱き故位なし總じて此鐵にて造りたる道具は最上の劔とは云ひ難し。

作州いん賀鐵にて作りたる道具

一此鐵にて作りたる道具は右実粟鐵の見つきに似て実粟よりは鐵色地刃共に美しく沸つき至つて細かに粒たち鮮かに匂ひあり鐵強くして極上とす此鐵の事々近江守繼平鍛ひし刀を研ぎて鐵味を覺えし故爰にしるす古作にては延壽など此鐵を用ゐしと見ゆ心を付けて考ふべし。

刀劔固癢錄に石州、藝州、伯州、播州の各國産の鐵性を論じて居るがそれは次の如くである。

一石州出羽此鐵剛強にして勢氣盛んなり通例の鍛冶は難鍛火中の加減惡しきときは碎け散ず。
一藝州ニキ一と印の入たる鋼鐵あり勢氣強壯にして最上なり勿論鍊意至極なり因て其産を尋ぬるに出羽鐵の選出したるものと對ふ實否を匡さず。

一伯州印賀及び作州なるもの勢氣右に次ぐ。

一播州千種此鋼鐵見る所細にして勢氣少く至つて遣好き者なり此に依て世上の鍛冶共多分右の鋼鐵を用ふるなり。

次ぎに鍛記餘論の中に見える伯州印可鐵の性質及びこれと出羽実粟鐵などとの比較論を掲げるといしやう。

一印可山の鋼は残る方なく白きこと雪を欺くまでなり今四方白などゝて尊ぶもあれど其比大に違ひ強くして油を注ぎたるやうにうるほひあり今の上がいふ鐵とたくらべんにはたとへば其鐵は生木の如し普々の鐵は枯れたる木に比ぶなり今の鐵は其白きといふかたも全く

は白からずして薄墨染の色に栗色を兼たるにて其上こゝかしこ黒くして皮に似たる方多し其鋼といづはしそふなど、分けていひなせどもとりく同じ様にしてくれにては分ち難し鋼の出所のわかれはあれどもそを常にあつかひてあきなふを事とする者だに多しかに見わけ難しいんが大水などいふもあれど其名さへ知らで鐵はいづはしそふちくさの三種の事ともふ者多し云々。

森岡朝尊の刀劔五行論にある石州出羽鋼伯州鋼の性質を論じたものは左の如くである。

一石州出羽鋼は本性赤き心あり鐵山の仕成折口も自然に赤し劔に造りては地刃鉞ともに或は黄或は赤味の色本性生れ付きにあり云々。

一伯耆鋼は本性白し刃色白く地色は赤黒きものなり鍛の術に依つて替る事あり云々。

新刀問答(若林東水著)上卷に

播州姫路の刀工手柄山氏繁は其國なれども千草鐵は用ゐずやわらかにして數遍鍛ふるに鐵に草臥出づるよし依つて伯耆鐵を用ふ云々。

又鐵山祕書卷一の中に諸國鐵刃金之事といふ一節があるこれに諸國產鐵のことが一寸見える。

播州実栗之刃鐵名物也ツルキニ鍛冶而切味疾ヨシ承傳フ上代ハ皆延鋼ト云物ニテ有リシナリ
伯州刃金尤吉是モ往古ハ延刃金ニテ有シナリ云々。

同書鐵之濫觴は備中州ト云フ譯不詳といふ條に備鐵のことを記して居るそれを抄録すれば

凡備鐵者名物ナリ鐵ノ性最好シ鍛鍊シテ疵少ナク鐵性ヤハラカニシテ遣好シ併シ性少シ弱キニヨルモノナリ且亦備鐵ニハ刃金ナシ適々刃鐵ノ如ク吹涌セバ不折ナリ元來鐵ノ性ヤハラカニ弱キ故也云々。

水心子の刀劔辨疑下卷に出羽千種及び諸國產の鐵性を論じて居る。

出羽千草強弱ありといへども製方聊別あるまでにて鐵性は同物なり予寛政十一年の春薩州産の伸鐵ををろして鋼となし二刀を造り刃味を試むるに二腰ともに乳割を落し土壇に通ししが刃少しも損せず刃味も宜しかりしなり、此外藝州産の鐵、奥州仙臺、津輕、外ヶ濱、南部、上野國禰里山産の鐵を吹をろして鋼となし刃味を試むるに何づれも宜し云々。

猶水心子は刀劔實用論の中に出羽千草の鋼について左の説をなして居る。

近世流行の出羽千草の鋼は吹方古人と異にして鐵山にて見分のみを第一として製する故能く熟したるもの少く只強過ぐる鋼にて候慶長以來の作新刀と號し候も夫故鐵色までも古刀とは一變したる事にて御座候故に新刀の大出來は勿論小出來にても折れ易き鐵性に御座候。

又刀劔實用論に今世流行の四方折八方白など唱ふる鋼を極品であると稱してゐるけれども是れはまだよく熟さず銳氣のあるもので所謂強過ぐる鋼であるから數遍鍛へても刃色黒く上作の位には至らぬものであるといふ、ところで此四方折八方白といふのは如何なる鋼であるかこれに就いて古今鍛冶備考卷之一に説明がある則ち、中古天文の頃から播州宍粟郡の千草鐵山に於いて白鋼を吹く法といふのが行はれた此の方法によつて出來上つたものが四方白八方白などいふのであると稱して居るから是亦播州千草鐵の一種であるとして見て差支なからうと思ふ、此白鋼の詳細の事は鍛冶備考に説明があるからそれに譲つて茲には省略して掲げぬつもりである、劔工秘傳志上卷に前掲刀劔辨疑の出羽千種に關する説と略ぼ同様の記事があるが重複を避くる爲茲には省略する。

(二)

以上は諸國産の鐵に關する個々の説明であるが次ぎに刀劔製作に使用せらるゝ一般鐵性に基く實用上の利害について論ぜられて居るものを抄録しやうと思ふ。

刀劔實用論に強過ぐる鋼は用ゐて上作の位には至らぬといふことを論じてゐる。

(前文略)今流行の四方折八方白など唱候鋼を極品と致し候へ共是は未だ能く熟し申さず銑氣有之品にて所謂強過候鋼故數遍鍛候ても刃色黒く上作の位には至り申さず候然るに其事を辨へ申さる鍛冶は能き品と心得て好んで用ゐ候者多く御座候夫故鐵山にても見場の能き爲めに四方共に打碎き易きやうに吹方を加減致し兎角強過ぎ候鋼多く四方共に火肌少しも是なく打闕き候を極上品と定め少しも火肌有是候處は同じ鋼の内にてても其次と致し其餘鎚跡有是候品は又其次と致し段々上中下を分ち候へ共元同物同性に御座候依りて右鎚跡はあり候品は能く熟し候所にて却つて上作に相成り品も稀には有是候又四方共に能く打闕き候品は未だ熟し兼銑氣はある所に候故鍛方に依り細美の鐵には相成候へ共刃色黒く上作には至り申さず候。

劔工秘傳志卷之上に強過ぐる鋼なるものゝ缺點を指摘して居る。

鋼出刃なりとも千草なりとも三四分程の厚さに打平げ水に入れ冷し打折て見るに強過ぐる鋼は焼割出でゝ其所に火氣戻りて折口茶色の如くに成る者なりかゝる鋼にて造りたる時は刃こぼれ易く刃色黒し上作に非ず然るを辨疑に折口の茶色なる鋼を以て善しとすとあり大なる誤りにて諸人の迷ひとなることなり(中略)然れども右様の鋼を用ゐて然るべき品も有之左の品なり。

鋸、鑢、錐、曲尺、左官の小手、疊刺の針、或は絲とりつむ

右の類には強過ぐる鋼宜し刀劔に用ゐては害多く益あることなし然れども鍛ひて疵少くして焼刃の模様成り易き故に諸國の鍛冶是を用ふるもの多し然れども上作の位には至らざるなり。

水心子は更に刀劔實用論後篇に於いて新刀辨疑の右の説の批評を試みて居る。

新刀辨疑に鋼を最初打平め水に入れ冷して二ッ三ッ打折るに其折れ口黄色なるを勝れたる鋼なりと記し候得共左様なる鋼は所謂強過候鋼故焼割と成り候て其割に火氣發して黄色に成り候にて刀の帽子に月の論などの割れの出候と同じ候事にて強過候證據明白に御座候故に右の説を取

り用ゐ候鍛冶の作焼刃の模様などは能出來候ても刃色黒く糠目多く中々以て上作の位には至り申さず候。

右の強過ぐる鋼云々といふことゝ殆んど同じやうなことを述べて居るのであるが劔工秘傳志卷之上に崩れる鋼と崩れざる鋼なるものゝ利害得失を論じて居る。

鋼を最初打平むるに崩れざると崩るゝとあり崩れざるは能く熟したる品故刀劔を鍛へて刃色白く潤しく上作の位あり然れどもふくれ出易く肌氣現はれ下手の業には成り難く自ら上作をなすこと能はず崩るゝ鋼は熟せざる品故銑氣ありて上作の品にあらず其證據は崩るゝ鋼と崩れざる鋼と二品鍛ひて刃味を試むるに崩るゝ方は強過ぐる故に微塵の如くこぼるゝ心あり崩れざる方はねばり氣有りて強く刃味強し故に滓ほどに白く焼きて打平むると雖も崩れざる鋼を撰んで用ふる事肝要なり。

猶二三の書に古今の差によつて地鐵に善惡あることを説き随つて新古刀に優劣を生ずるものであるといふことを論ずるものがある、鐵山秘書に。

鐵山ノ始メハフミフキト申シテ今ノ鑄物師ノ高殿^{タラ}ヲ用キテ鐵涌カセシナリフムフキ多ク良ト云ヒシハ重ネ言葉ナルベシ刃鐵ヲ第一ニ吹キシナリ銑ハ僅カニ涌程涌カセテ始終皆刃鐵計リヲ押タルヨシ故ニ上古ハ刃金性强能カリシ故ニ劔モ名物多ク出來タルナラン云々。

併し乍ら又刀劔固癖錄にはこれに反するやうな説もある則ち其説に依ると諸國產の鐵近世になつて善惡を論ずるものが少くないがそれは各人使ひ馳れたものを標準として論ずるので右様の説が出るのであらう、諸國に出づる鐵は其地理によつて自然に剛柔の區別があるけれども格別の優劣があるわけではない多少精粗あるのは全く吹別れの別に依るのであるといふ、鍛記餘論には古今によつて鐵性の著しく相違あること随つて新古作にも優劣あることを論述して居るこれを左に抄録

する。

すべての物は皆古今のたがひあり大方のものは古しへの方まされる方多し夫かうちに太刀刀は殊に古しへの方すぐれたりよからぬも近世の勝れたるとたくらべんには古作の悪しくといふ方こそ其用のまされる方多し又鐵も古今のたがひありて近き頃の鐵によきはあらずその悪しき鐵もて近世の大方の鍛治共が古作にまぎらさましとおもひつゝ作りたりともよきことは一方ならぬ違ひありしかはあれど今の鍛を古作と見紛ふは地鐵の味ひを知らざる故の過ちなり(中略)鐵には古今とのわかれ有るべしとも大かたには覚えねども山の深き方と淺き方にも分ちあれば又はむきにもよりて同じ山より出ると南と北との分ち西と東とのたがひありといへり又何づれの處より出づるも古しへの鐵は今の鐵に勝れり夫かうちに其製にも古今の違ひあり云々。

以上に於いて我が國諸國產の鐵の性質及び鐵性による一般的得失論を掲げたのであるがこれとも僅かに刀劍書以外に出てぬことは最初に辯明して置いた如くである次ぎに南蠻鐵に関する記載を集録することとする。

(三)

南蠻鐵が何處に産するのであるか全然記載がないたゞ當時に於いて和蘭人の持來した西洋の鐵であるとして漠然として承知して居つたものゝやうである。

古今鍛治備考卷之一に南蠻鐵には大古渡、中古渡、矩冊、木の葉、瓢箪形などの種類がある享和年中には銚も輸入せられたといふそれで南蠻鐵の性質は本邦の出羽鐵よりも大いに堅く銚のやうである瓢箪形、木の葉形何れも鎔に流し入れたものであるから崩れて鑢することが能きぬから少しづつ熱して打延して用ゐるのであるといふ、劔工祕傳志卷之上には次のやうな記事がある。

一南蠻鐵、魯細亞鐵、阿蘭陀鐵各々其性異りと雖も我國の風に製する時は則ち本邦の鐵に同様なり

何れも製法によりて剛柔大いに異なるなり其證據は近年異國鐵を以て二刀を鍛へたる事あり西尾侯の臣にて予が門弟中塚三秀君命を蒙り南蠻鐵にて予が宅に於いて造る其刀則ち彼侯の藏となれり又今年二月南蠻鐵魯細亞鐵阿蘭陀鐵を以て一刀を造りしに我國の鐵に替る様も見えず云々。

神田白龍子の新刀銘盡卷之一に右と同様の記事がある。

一凡南蠻鐵を以て刃金に用ふる事は越前の葵康繼を以て始めとす、康繼より前南蠻鐵を用ゐたる鍛冶なしそれより以來南蠻鐵のよき事を知つて諸國の鍛冶播州の宍粟石州出羽の鐵の外に南蠻を以て鍛へたる多ししかれども南蠻鐵は至つてこはくして中々刃金に鍛へ難しといへり古作に會つて南蠻鐵なし元和以後の新身ばかりなり。

狩野氏舊藏書本(現東北大學理學部所藏)鍛冶秘書に右と同様の記事があるこれは明かに同一人の筆である孰れを先き孰れを後とするかはつゝ調査の機を失したが兎も角二書の關係あることは事實疑ふべからざるものゝやうに思はれる。

新刀辨疑卷之一には石州出羽鐵も播州千種鐵も扱ては又南蠻鐵といつて和蘭人の將來した木の葉形瓢箪形の鐵でも刀劔製作の結果に別に優劣はないのであらう、優劣の生ずるのは鐵の善惡にあるのではなくて鍛冶の巧拙に依るのであらうと稱して南蠻鐵を以て我國産の鐵と敢へて差異なきものと認めて居る。大村加卜の劔刀秘寶に

南蠻鐵ノコトヒヤウタン鐵サヲ鐵トテ二色アリ何レモ南蠻ニテフキテ鎚ヲ受ケルヤウニシテ來ルナリ刃物ニ打テハ嗚呼惡シキナリ日本ノ銑ノ如キ鐵ナリ惣ジテ異國ニハヨキ刃金ナキニヨツテ刃物ニヨキハナシ(中略)右南蠻鐵ヲ日本ニテ刀脇差ニ打テモ何ノ用ニモ不立ナリ但信國ノ膚ニ使フニハ吉シ扱又南蠻鐵ヲ具足ノ鐵ニ十四五遍モ鍛ヘテ用キテ吉シ(中略)南蠻鐵ト日本ノ銑同ジ

鍋鐵ニテモ日本ノ銑ハ珍強シ二十遍鍛フテモ南蠻鐵ヲ十二三遍鍛フタルヨリモハシカキナリ。
察刀規矩に南蠻鐵(ひやうたんてつ)の鐵性のことが詳しく記されてゐる。

此瓢箪鐵にて鍛ひたるは刃色青目に黒く光りありて沸至つて細かに匂ひ深く地刃共に鐵つまりて細かにうつくしく見つきは実粟鐵に似て沸つき潤ひは出羽鐵の如し研ぎ上げて刃味共によりしく亂刃は延壽などの如し目利の節何作とも作柄極め難し此の上なく最上の鐵なり。此鐵享保年中に日本に始めて南蠻より渡り康繼に仰付られ則御刀に作る享保十八丑年長崎の住人河野七郎右衛門實名養利といふ鍛治江戸にて丸南蠻鐵にて二尺三寸の御刀を打ちしを研ぎ御仰せ付られ其後元文己年の春六代目の康繼へ仰付られ濱御殿に於いて丸南蠻鐵を以て御刀を作りしを又御研を仰付られし故委しく其鐵性を覺えしなり云々。

察刀規矩の著者竹屋政熙が寛政頃の幕府御用研師として斯道に於いて造詣深く其説の傾聽するに足るべきものであることは事新しく述べるまでもないことである殊に出羽鋼千種鋼印可鋼南蠻鐵などの鐵性の研究に就いては可成り自信のあるものである様子が同書に見える猶政熙の説に當時南蠻鐵で作つたといふのが多數あるけれども自分が直接研ぎ上げた標準の南蠻鐵に比すると大いに鐵性が相違して居つて多くは銑卸で作つたものゝやうに見えろと稱して居る。

刀劔五行論の南蠻鐵の事を記したものに支那の渡りに瓢箪鐵南蠻鐵同ずく等も自然に性赤味あり出羽の鐵に類したるものなりとある。刀劔固癖錄には南蠻鐵が日本劔工によつて使用せられてゐることを認めてゐるが別に其性質などについては一言の記載もない。

第二章

次に緒言に述べた第二の意味の地鐵則ち打上後の刀身の鐵性に關することを述べる。

さて日本刀選擇の標準を立つるに當つては人々其の主とする所の見解に相違があつて或は沸匂に

より或は焼刃の巧工により或は移り、砂流、チケイ、銀筋などの有無により或は刀の品位などいふことを最先に考慮の中に入れる等様々の判別法を試みるのであるが是等の數ある中で地鐵の良否如何によつて判別することが最も適確で且つ根本的のものと認められてゐるやうである、而して上述の鑑別法も要するに地鐵の鑑別法に過ぎぬことは以下述ぶる所によりて諒解せらるゝことと思ふ、たとへば刀劔書に地鐵とか地色、刃色、地肌などいふ言葉が殆んど同一事實の説明に混用せられてゐる場合の多いのが其の證據であらうと思ふ、これには多少無理な點も生ずることであらうが大體此方針で本節に關するものを集録するつもりである。

(一)

若林東水の新刀問答序文に地鐵が刀劔に於ける主要な着眼點であることを述べて居る。

凡刀劔之爲物。其用在斷割。其功在利鈍而品等從之定焉。統之全因地鐵之精粹也。若相刀失之。地鐵則其觀踰干莫。勿堪斷割矣。(中略)其論之。唯能在辨地鐵。如沸句。乃由地鐵之純精而發。故可以地鐵而見沸句。不可因沸句論地鐵也。至于燒刃之巧工。僞工或能之。云々

之れによつて見ると新刀問答の著者の意見では近世の人は沸句や焼刃模様の巧拙のみによつて刀劔の價值を判斷して地鐵の良否といふことを深く顧みぬから品等を誤斷することが多いのである、刀劔の功用はその斷割利鈍にあるので品等はこれに應じて定まるのである、然るに是等を代表するものは、全く地鐵の如何にあるのであるから第一に地鐵の良否を辨じなくてはならぬ、沸句の如きは地鐵の純精によつて發するものであるから沸句によつて地鐵を論ずべきものでなく地鐵によつて沸句を論ずべきものであると稱して居る、猶同書の本文の中に「地鐵は身體沸句は勢なり、身體堅固にして且勢ある故に業勝れるなり依つて地鐵の詮議詳しくすべき事明白なり」云々など、唱へてゐる、地鐵の詮索を以て鑑刀の要諦としてゐる説を左に列舉する。

一金善き劔は則上作也、上作とは物よく切るゝを以て上作とす(中略)相劔の要は鐵の善惡を知るにあり鐵よきを知るに利鈍は其中に有り云々(新刀辨疑卷之九)

一善惡眞草行を見分くるを目利とはいふ善の中に上中下あるを眞草行と云ふ、惡にも三段あるなり、然るに善に刀を見するといふもかね也、又惡にも同じ鍛にまじりなく、かねよくすみて、すきてはれて、少しもにごりの心なきを善とはいふ云々(相劔口訣秘傳)

一武夫の刀劔を鑑定せんは先地鐵の良不良刃の利鈍を明らかに知るを肝要とす國形儀其作筋を糺さんと是に深く心をつくすときは却つて目利の主意を失ふなり云々(刀劔雜話)

一太刀刀は地刃をはなれ地鐵によつて見分せんには如何に似つかはしく作りたりともあざむかるゝ事はふつにあらぬわざなり(鍛記餘論)

一今の鍛を古作と見紛ふは地鐵の味ひを知らざる故の過ちなり地鐵をだに見覺ゆる時は聊も見紛る事なく其違ひは明らけく知らるゝ業なりこれを物に譬はゞ檜の板目と杉の板目程も其様は違ひて紛るべき様はあらぬ様なり其の違ひは鐵のよしあしと工みの鍛への業によりて一方ならず違ふ方は自ら出来ること明けし云々(同上)

一(前文略)亂れ頭の鎬を越したるなども稀にはあるものなれども其地鐵によりて折れ難きもありぬべしをれ曲りのもとは地の刀にありて刃絞のとがにはあらざるなり(撰刀記)

猶古今鍛冶備考には相劔の道に於いて鐵性の良否を選ぶことが其の根本義であるといふことを力説して居る今これを約説すると、往昔では相劔の事は刀鍛冶の任務で鐵性の良否を批判することを專一として居つたものである。治承元年中に後鳥羽天皇が御番鍛冶を集めさせられて鐵性の良否を鳳論せられたといふ、降つて正和文明頃になつても相劔の道は依然として鐵性の選擇にあつた、然るに後世になると鐵性の優劣を究むることは困難なことであるので單に先人の選定して置いた刀匠

40
の作銘や出來を知ることのみに満足するやうになつたので唯眼に映ずる鍛へ肌とか惘刃の模様とか銚子の形、沸匂などに規矩を作りこれを詳知することを專一とするやうになつたのである。是れは刀劍の古今の造法と鐵性の利鈍を辨別することが至難な爲めであらう云々と説いて居るのである。以下少しく生地鐵の良否に關する説を掲げることとする。

最初に窪田清音の撰刀記にある地鐵の説を抄録することとする。

一 地鐵の上^上かみ^{*}なるは地紋の板目、柢目などにかゝはらずいかにもこまやかにしてしかもうるほひ有て寄も多年に見ゆるぞ上^上が上なる物也(下略)。

一 應永より後なる備前鍛の刀に地鐵むら／＼として板目のうちに無地のかね見や又は刃ぶちに柢目などの見ゆるは皆こ^目はがねをば砥數にあいぬる度々に研落して内にこめ入たる眞かねのこゝかしこより出たるなれば刀の刃弱り撓み易ければ刀の用はなり難し此類祐定などにいと多し。

一 古作に柢目より板目にうつり又夫が中に無紋のかねも見ゆるに其はだなきかねよりして板目にうつりま^目さめにうつりていかにも地紋の揃ひとのはざる地ありこの地前に記す眞がねの出たる様に見まざるもの有此地鐵は鑑へを重ねずしてうちのばしたる製りさまなり後の世の作にはたえてなきさまなり伯州安綱眞守などに此さまあり其外にも其後の作にはまれ有ものなれども世人多くはけぢめをして數すこのきたへも上かみなり。

一 地鐵の位は青江物又古き備前に上たるもの多し相州にも大進房行光正宗貞宗の地鐵こそ上が上なり秋廣に至りていさゝかあと^目りぬべし廣正正廣は又之れに次ぐべし綱廣に至りては又大に劣れり又諸國に鍛冶多き中に古へより上作と名づくるものに地鐵のあしきはあらざれども夫が中にいさゝかなるたがひ有たとへば作にても夫々に地鐵の万(方?)いさゝかのたがひある

ことは其物を多くらべて見て知るべき事なり。
一地鐵のびやかにして本す衛のわがちなく地紋のかはるかたなくたいらかに有がうちに刀見え
てたゆみなきも上が上なり。

一地鐵のびやかならずいやしき様あるものありこの作は鍛まざらしき者の作にしてわかし延し
もきたへもしたるに其ほどのあつかひあしきなりこの様北國に多し寒國寒中の製などにこの
さま多し太刀刀の手取重くして地にうるほひなければ刃損じ易し。

一地いかにも強く見えてうるほひなきは折れ易したとへ折れざるも刃損じ易し。

一地やはらかにして刃なく見ゆるものは大かたはたはみ易きものなり。

一近世のをろしがねの鍛へにては地細かにして大かた人の目にはうるほひあるやうに見ゆれど
もよく見るときはかはき心ありて火過ぎたるは刃損じ足らざるは曲り易くよきほどなるもつ
よく物にふるゝときはまがりもし又は刃のかけもして此の製よからず足らはぬ目には花やぎ
たるに泥みて愛ずることなかれ刃業必ず惡しし。

此の一節は報告第十四「刀劔鍛鍊法の異同及其得失」の中に近世の卸鐵法を非とする例の例證として既
に引用したものであるが今亦地鐵に依る刀劔の判別法として更に茲に引用せられた次第である。

一月山などの類ひ作り肌地にあるものは中には乾き心あるもの多し此の製よろしからず作り肌
は殊に其さまいやしされどもいさをしもあらば見ざまは厭ふまじけれども綾杉玉もく有とも
いさゝか其功なしすべてあまりに肌あるものはつくり肌にあらぬもよろしからず殊に刃の中
へ肌の入るたるは物にふるれば其肌より缺け易し。

一地かたく見ゆるものは折れもし缺けもするなりかたきかねには必ずかはき心あるものなり。
一つくかね多く入りたるは鍛は必ずかはきあり故に折れ損じ易し永田などを以て知るべし。

此一節も亦報告第十四の中に参照した筈である。

一地紋地鐵の製によらずかはき心あるものは必ず折れ易したとへ折れずとも大いにかねなどすべし。

文政天保頃に著作された細谷通寛といふ人の刀劔雜話といふ書物の中に主として研磨の上から地鐵の良否を論じた一節があるこれを示せば左の如くである。

一地鐵味ひなくして剛く刃弱きものあり刃にかゝるに刃先ほろく／＼と缺くる也この如きものは戦ふとき必ず折ると知るべし。

一地鐵全備して能き劔は刃に掛るに一方より刃げば刃先もつちりと髪の毛の如く砥返へりて又一方より刃げば糸の如く長くつゞきてとれるなり是をよき刃味といふべし地鐵は強くして剛からず柔かならずひつた／＼と砥あたりするを能地鐵といふなり位卑き作にても此如き刃味有物を好み佩刀になすべし(下略)。

右の文の續きに猶ほ刃ぎの次第によつて良劔も惡劔に見え純刀も良刀に見ゆることがあるといふことを説いてゐるそれ故に不審のある刀は刃いで地刃の鐵味を吟味しなければならぬといふ本阿彌家の刃方は根元の鐵性作の位を自然刃の上に現はすやうに刃ぐのであるから中作以下のものは地刃荒けて見にくくなるものであるといふ斯様な次第で本阿彌家に鑑定を依頼するものがあると刃いだ上でなければ確たる極めは覺束ないといつて斷ることがあるといふ。

次ぎに古今鍛冶備考の鐵の良否に關する辨別法のことを掲げることとする。

一刃の内碧色を含みて白くいかにも刃のかね締りて艶能く地かねも金氣顯はれ山の端に月の匂ひのさしかゝりといへる古歌の心ありて自然物深く潤あるを最上とす。

其次は刃の内しまらざれども碧色あるを良しとす又地鐵もうるみ爛刃も沈みて刃黒く見ゆる

刀にても物のよく切るゝあり是れ鐵の垢は去らざれども火加減よく金氣の満たる故なり或は地刃共によく締り刃文浮たち地よりも一際高く鐵よく見えて切あしく折易きものあり或は切よけれども折易き鐵合あり此等大いに差ありて一篇に説くべからずされど極意は金氣の満ちたる故としるべし(下略)。

又二三の書に五種の鐵とか五鐵とかいふことを掲げてゐる。

五鐵(本朝鍛冶考卷之十)

一 亮たる鐵 一 鍊たる鐵 一 堅き鐵 一 識き鐵 一 軟なる鐵

五種の鐵(如手引抄)

一 軟なる鐵 刀に作るに並の鐵なるべし。
 一 ねばき鐵 軟き鐵を型の如く鍛ひたるなり。
 一 ねれたる鐵 軟かき鐵を鍛ひすましたるなり。
 一 かたき鐵 刃心のなみ別と見えたり。
 一 さえ鐵 堅き鐵を鍛ひすましたるなるべし。

五種の鐵(竹翁古刀奇鑒)

一 軟なる鐵色 地色むくやきて底の鍛見えて弱きことなり。
 一 ねばき鐵色 地いかにも細かにしてトロリとありてあらはにねりぬき肌なり。
 一 ねれたる鐵色 かたくもなくやわらかにもなくねばくもなくあるを云ふ口傳多し。
 一 かたき鐵色 地いかにも青めにして上のかね一入つまり地色は青くして黒く有りて刃色も白く青めなるものなり鍛細かなり口傳あり。

一 さえたる鐵色 右の四色の鍛地色に違つて少しもたれず鍛しぶとくさらりとしたる體に

ていかにも闇の夜にさえきりたる空を見る如くなり。

本朝鍛冶考の五鐵といふことに就いては右に掲げた通りで別に其説明はない、たゞ地鐵の色艶によつて名づけたものであるといふことが斷つてあるだけである竹翁古刀奇鑑の五種の鐵といふことも右に掲ぐる通り鐵色といふ文字が用ゐてあるさすれば是等は地色とか刃色とかの中に述ぶべきであるがしかし其説明などを見ると鐵色などいふことに關係が遠いやうであるそれに如手引抄の五種の鐵といふことが他に五種の鐵色といふ項を設けてこれと區別して説いてあるから旁々如手引抄の意見に従つたわけである素より最初から辯明した通り是等の言葉は互ひに混用せられてゐるのであるから文字に拘泥する必要はないのであるが便宜上かく類別する次第である。

さて是等の言葉は鑑定書にはよく用ゐられて居る言葉である如手引抄の説と竹翁古刀奇鑑の説とを綜合すると五種の中でねれた鐵さえた鐵といふのが優れた鐵性を意味するやうに考へられる。

(未完)